

令和2年度 第2回泉佐野丘陵地緑地 運営審議会
中地区検討部会

日時：令和2年10月20日（火）10:00～12:00

場所：泉佐野丘陵緑地 パークセンター

出席者：

増田委員長 前中委員 佐久間委員 櫻井委員 中平委員 小門委員 那須委員

◆概要

1. （仮称）10周年誌について
2. アフターコロナ時代の泉佐野丘陵緑地の展開について
3. その他：えんづくりプログラムの募集について

1 (仮称) 10周年誌について

- ・2010年と現在の植生図を比較すると、大きな変化があったのはリーディング区域だけである。10年間に渡って整備を続けているが植生図に大きな変化が見られないということは、それだけ植生を大切に扱っているということでもある。
- ・植生に大きな変化を加えずに整備を続けてきたということに意味がある。公園の造成においては植生を激変させることもあるが、この公園は既存の植生を大切にしながら展開してきた。したがって変化していないことは良いことである。公園は開発であると言われ、自然保護団体などから反対運動が起きることがある。この公園はそうではない。

■タイトルについて

- ・10周年というのは、パーククラブが設立されてからの10年を数えている。しかし今回は公園全体の記念誌であり、実際にはパーククラブ設立前から公園づくりは始まっている。そのように考えると、10年という年数にこだわる必要はあるのか。
- ・「つくり続ける泉佐野丘陵緑地のあゆみ」として、副題に「パーククラブとパートナーを組んで」としてもよいだろう。「府民ボランティア（パーククラブ）」としてもよい。表紙にパーククラブという言葉が出てくるといい。
- ・今回の府民参加は大輪会による支援が大きいので、そのことも伝わるタイトルがいい。
- ・「府民（パーククラブ）・企業（大輪会）とのパートナーシップによる公園づくりへの挑戦」という副題でもよいかもしれない。初めての試みなので、「挑戦」「試み」という言葉を使うとよいだろう。
- ・表紙のイメージについては、この公園は施設づくりではなくコトづくりなので、パーククラブの皆さんが汗を流している様子などの写真を使うといいだろう。景観ではなく人が見える写真がよい。複数の写真を組み合わせても、アップで使うのに耐えうる写真があれば、それでもよいだろう。

■発信方法について

- ・Youtube上で資料を閲覧できるようにしておくと、再生回数から視聴数を把握することができる。
- ・りそな銀行の地下のホールで、泉佐野丘陵緑地をテーマにシンポジウムを開催させていただいたことがある。今年度はコロナ禍につき難しいが、次年度以降は検討できるとよい。

事務局

- ・10周年誌について、運営審議会で扱うのは今回で最後とし、増田会長の監修のもとで完成を目指すこととする。

- ・大泉緑地では、新金岡駅から公園の中まで携帯電話で案内される仕組みがある。
- ・レンタサイクルが活性化されると、この公園も拠点の1つになるといいだろう。
- ・泉佐野市でもシティプロモーションに取り組まれている。閑空にたどり着いて、半日くらい空いているならば公園にも来てもらえるような導線があるとよい。

- ・コロナ禍で活動できていなかったが、10月から泉佐野市によるシティプロモーションと、大阪府と連携した戦略に取り組んでいる。

- ・コロナ禍においては、インバウンドに偏重していた地域は大きなダメージを受けている。逆に地域内観光にしっかりと取り組んでいた地域は、大きなダメージを受けていない。地域内観光を充実させることも大切である。
- ・堺市でも、市民が市内を観光しないことが課題の1つとなっている。泉州は熊野古道沿いなどの歴史の蓄積がある地域なので、それらを活かした地域内観光に取り組むとよいだろう。

- ・和歌山県庁でもワーケーションが話題に挙がっていた。ワーケーションは、来てもらうことがゴールなのか。東京から白浜に来て仕事をして帰るだけでは効果が薄い。それが移住につながることや、ワーケーションに来た人たちと地域が連携して課題解決に繋がることなどが出口として必要だろうという話をしていた。この公園もwifiを拡充すればワーケーションの場としても活用できるかもしれないが、例えば公園にも電動自転車のポートを設置して、公園から地域を回ることができる仕組みをつくることできるといいかもしれない。

- ・これまでは、地域の旅行代理店に行っても海外旅行などの案内ばかりで地域資源のことがわからないと言われていた。今は南海電鉄が沿線の活性化に取り組むことで、結果的に乗客数を増やすことにつながっているようだ。沿線の地域と乗客が繋がる機会をつくっている。
- ・小学3年生くらいになると地域学習のカリキュラムがあるが、それを対象にした学習プログラムを用意するといいたいだろう。堺市を見ていると、小学校が地域学習として外で使う時間は実質2時間程度である。例えば小学生向けの約2時間程度の学習プログラムを用意し、それを小学校に配布するという方法が考えられる。堺自然ふれあいの森では、堺市の約90の小学校のうち約30校が地域学習として訪れている。
- ・幼児教育として自然の中で遊ばせたり学ばせたりすることを売りにする保育園が増えてきている。これらの層もお客さんとして想定できるかもしれない。
- ・お客さんに向けて紙芝居をやっているのであれば、それを動画に収録してホームページやYoutubeにアップするといいだろう。最近は動画編集ソフトなども無料で提供されているこ

とが多く、スマートフォンでもできるようになっている。そういったことも取り組んでみるとよいだろう。

3 その他：えんづくりプログラムの募集について

これまで半年ごとに募集を行っていたが、今後は通年で募集を行っていきたい。

以上